第３回日本実践美術教育学会賞（辻田賞）受賞
特別寄稿

芸術療育
～いつもの日々に花束を～

Ｂ施設（障がい児入所施設）保育士
瀧澤　文也

1　はじめに

私は人の人生に関わることを仕事にしている。でもそれは、何かを教えるとか、どこかに導くというものではなく「共に生きる」という言葉がしっくりとくるように思う。養護施設の保育士となり 11 年の月日が流れ、それは芸術をもって子ども達と触れ合ってきた時間でもある。ふり返れば、こども達との数えきれない物語があり、その中で表現とは何か、受容するとは何か、人間とは何かを考えさせられた。

恐らく、養護施設で働いている職員には語ることのできない物語を持っている。それは宝物のような自分だけの物にしておきたい話から、辛く悲しい語る勇気がでない話まで。

今回はいくつか、こども達との思い出を綴りたいと思う。

芸術に直接関係のない話ではないかと思われるかもしれないが、養護施設で生きるこども達を知って頂くこと、芸術療育の背景にある繋がりある生活を感じてもらうことで、芸術とは、表現とは、に何かを感じて頂けると思う。

2　ある日の日向ぼっこ

一年目の冬。Ｂ施設には成人の方が何人かいた。子ども達が学校に行っている間、成人の方は草取りや畑仕事など、作業の時間となる。他の入所者の方が動いている中、Ａさん（30 代・重度知的障害・言葉でのコミュニケーションは困難）は職員の声掛けに耳を傾けず、座り込んでしまうことがほとんど。その都度職員に注意をされては、Ａさんが怒って物を投げる、噛み付くの繰り返しであった。なぜか私の声掛けには応えてくれることが多かったため、Ａさんを作業場へと連れて行く役割をしていた。私はＡさんといる時間が多くなった分「Ａさんは幸せなのだろうか」「年下の私にトイレや入浴介助をされているのに嫌ではないのだろうか」と考えるようになり、いつしかＡさんは可哀想な人と思うようになった。

冬のある日、先輩職員から何度声を掛けてもＡさんが部屋から出てこないため、連れてきて欲しいと言われ、Ａさんの部屋に出向いた。Ａさんはにっこりしながら「おいで」と言い、手招きして私を呼んだ。皆が寒い中作業をしていることもあって、Ａさんの姿に怒れてしまい「Ａさん！作業の時間だよ！行くよ！」と強く声を掛けた。しかし、私は腕を掴まれ、Ａさんのもとへ引き寄せられた。Ａさんに対しさらに怒りが込み上げてきたが、Ａさんは目を瞑って気持ち良さそうに日向ぼっこを始めていた。私自身、部屋の窓から入る暖かい日差しを感じ、その感動から「あったか～い」と言葉に出る程であった。隣から「あいっ（はいっ）」と返事をしながら笑顔で私を見るＡさん。作業場に向かわなければならない使命感より、一年目の未熟者は「今はＡさ

んと一緒に日向ぼっこ」を選び、Ａさんに対する可哀想な人という決めつけをしていた自分を恥じた。

日常の小さな幸せを存分に感じ、それを思い出させてくれたＡさん。さすが人生の先輩だ。それ以来、座り込むＡさんと短い日向ぼっこをし「そろそろ行こうか」と声を掛けると以前よりも、自ら立って作業場へ向かってくれるようになった。一年目の私にとってＡさんとの日向ぼっこは学びの時間でもあった。

３　別れの日まで

Ｂさん（女子、軽度知的障害）は小学３年生の時に入所。元気で明るい素直な子であったが、その素直すぎる言動が周囲とのトラブルに繋がってしまうこともあった。

Ｂさんと初めて行った造形活動のことを今でも覚えている。当時保育士として２年目であった私は、動物をテーマに絵を描いていたＢさんに対し、「この動物は、こんな形はしていない。図鑑をよく見て、ちゃんと描いて。」と伝えてしまった。その時間、Ｂさんは目に涙を溜めて絵を描いていた姿が後悔という思い出として残っていた。

小学５年になると大舎制の施設からユニット制の施設へと生活環境が変わり、男女別の空間での生活が始まった。

小学６年になる頃には、周囲の事を気にかける優しいお姉さんになっていた。また、Ｂさんは私と一人の女性職員を相談相手とし、信頼してくれていた。

そんなある日のこと、Ｂさんは私と女性職員に動物の名前（Ｂさんが職員に好きな動物を聞いたうえで付けた。Ｂさん：ゾウ、私：カメ、女性職員：ネコ）を付けて呼ぶようになった。理由を聞くと、Ｂさんは「だって面白いじゃん」とだけ答えた。また、Ｂさんにゾウと呼ぶのは抵抗があり、違う動物（できれば小動物系）にしないか提案したが「ゾウが好きなの」と言うため仕方なく応じることになった。

すぐに飽きるものだと思ったが、女子フロアでは常にＢさんは動物の名前で私や女性職員のことを呼んでいた。動物名の意味を知らない他児童から変に思われるのも可哀想だと思い、動物の名前で呼び合うのはやめようと伝えるも「変に思われてもいい。楽しいから大丈夫」と断られてしまった。その後すぐに女性職員から「動物の名前で呼ばせてあげてほしい」とお願いされた。実は動物の名前で呼ぶには深い意味があった。Ｂさんは女子フロアで他児童から嫌がらせを受けており、職員と話すにも他児童に知られたらそれもまた、トラブルの火種になってしまう。そのため、職員を動物名に暗号化することで他児童に気付かれないようにしたのだとか。また、私に心配かけさせまいと常に「楽しいからいいじゃん」と言い続けてきたのだ。

Ｂさんの思いに応え、Ｂさんをゾウ、女性職員をネコと呼び、私はカメと呼ばれながら、他児童に知られることのないよう心掛けた。

Ｂさんは小学校を卒業すると同時に施設も退所となることが決まっていたため、別れの日まで、三人で沢山の思い出を作った。別れの当日、帰り際にＢさんは泣いたまま、旅立つ車に乗ろうとしなかった。車に乗るどころか部屋に戻ってしまい、職員一同困っていたが、その数分後、部屋から戻ってきたＢさんはまっすぐ私の所に来て、手紙と千羽鶴を渡してきたのだ。Ｂさんは「フーミ（私）が入院しちゃうのが可哀想なの」といって更に泣き出した。確かに持病で入院を控えていた私だが、Ｂさんが内緒で千羽鶴を作っていたことを知らず、別れの日まで私を心配してくれたことに、Ｂさんらしさを感じた。Ｂさんは最後に「手紙は私がいなくなったあとに読んで」といい、別れを告げた。

Ｂさんの手紙には、ただひたすらに私の体調を心配し、感謝の思いが書かれていた。

そこに同封されていたもう一枚の紙にはゾウの絵が描かれていた。そこには一言「ゾウの絵、ちゃんと描けるようになったでしょ。」と添えてあった。

Ｂさんの大きな優しさと３年越しのゾウの絵には言葉にならない思いが詰まっていた。

４　何でおなか触ってくるの？

入所してきたＣくん（小学５年・中度知的障害）は私のユニットで一緒に生活をすることになった。愛嬌もあり「フーミ（私）好きよ」と抱き着いてくる甘え上手な男の子。しかし、ＡＤＨＤ傾向であり、癇癪や衝動性が強く、対応に追われる日々でもあった。Ｃくんが敵視する対象者には大人・子ども関係なく暴言暴力に出てしまい、気持ちの切り替えも時間が掛かるため、登校前となると、スクールバスに乗れない日もあった。

私との関わりの一つに「Ｃくん変身シリーズ」なるものがあった。Ｃくんは映画のヒーローや一昔前のロックバンドが好きであり、よくビニール袋や段ボール等を使ってヒーローたちの衣装や武器を作成し、ごっこ遊びを行った。

そんな笑いと困り感の抜けない日々を送っている中、Ｃくんの言動に対し一つ、理解できないものがあった。それが、食事中に私のお腹を触るというもの。

「何？どうした？何でお腹触ってくるの？」と返しても、私の顔を見て何を言うわけでもなく手を戻す。また、別の日では手を伸ばすことなく、食事を終えることもあった。ふざけているのか、注意散漫なのか・・。色々と考えたが、食事中に触られたくないことを伝えることだけの対応とした。というのもＣくんは偏食が見られ、苦手な食べ物が出るときは席に着くことさえ時間が掛かってしまう。極力食事に集中できるよう、関わっていたからだ。

Ｃくんは私が隣の席で食べることで、席に着くことはできたが、苦手なものは細かく切ったり、会話をしながら気持ちを乗せたりと試行錯誤の毎日であった。

そんなある日のこと、答えが分かる日が来た。その日も食事中に、Ｃくんは眉間にしわを寄せながら、私のお腹をさすってきた。今日は一段と表情が強張っているなぁと感じつつも、同時に決まってタイミングの悪い時にお腹に手を伸ばしてくるなと思った時、その行動に理解ができた。

私「もしかして、心配してるの？」Ｃくん「（私の）お腹痛いもんで」私は「痛いんじゃなくて、ゆっくり食べているだけだよ。」と伝えた。

私は苦手な食べ物に対し表情には出さない様にしているものの、口に入れるまでに時間が掛かってしまう。その姿を見て、Ｃくんは私が腹痛であると思っていたのだ。それを心配して私のお腹に手を当てていた。言葉でのコミュニケーションでは十分に伝えられない思いも、Ｃくんはその手に気持ちを乗せて私のお腹に触れていたのだった。子どもの行動一つ一つに意味がある。よく聞く言葉ではあるが、Ｃくんはまさにそれを肌で実感させてくれたのだ。

５　私は障害者じゃないよね

Ｄさん（女子、軽度知的障害）は、私にとっても記憶に色濃く残る児童であった。と言うのも私が入社したその日に、Ｄさんも入所してきたのだ。出勤初日の緊張感は小学２年生であるＤさんの大きな泣き声とともに始まった。

お互い施設に慣れた頃、天真爛漫なＤさんは悪戯好きで、一緒にふざけ合った思い出が山のようにある。Ｄさんが寂しい時や辛くなった時はよく「フーミ（私）は私と一緒だから。」と言っていた。これは一緒に施設に来た仲間という意味であり、養護施設では度々同じ時期に入った児童と職員

で不思議な仲間意識が生まれることがあった。Ｄさんが小学５年になる頃、施設がユニット化になり、Ｄさんと私はフロアが分かれ、中々会えなくなってしまった。

女子フロアには自己主張の強い児童が多く、Ｄさんはその環境に馴染めず、自室に引き籠るようになってしまった。

中学生になると、それまでいっしょにいた同年代の入所児童が一斉に退所となり、Ｄさんはさらに口数が減ってしまった。

そんな中、私のユニットからＲくん（男子４歳）が女子フロアに移動となり、同室の児童をＤさんにお願いした。Ｄさんは私がＲくんを大事にしていたことを知っていたため「私がＲくんをしっかり見るよ」と前向きな返事をくれた。それ以降、Ｄさんと顔を合わせると「Ｒくんがこんなことあったんだよ」と嬉しそうに話してくれる様子を見て、心底ＤさんにＲくんをお願いしてよかったと思った。

中学２年になると、Ｒくんは再び男子フロアに戻り、Ｄさんは一人部屋となった。

Ｄさんは中学３年になり、学校での実習（特別支援学校では就労による実習がある）があったが、自己表現ができず、十分に取り組めなかった。生活の中でも自室にいることが多くなり、表情も暗い印象が強く残っている。

その時期、私は施設内でダンスを通した療育活動を行っており、それを知ったＤさんより「私もやってみたい」とのことでダンスグループに入った。運動が得意でなかったり、そもそも人前で踊れる状態ではなかったが、周囲の児童と実力的に差がついても、練習を休むことは一度もなかった。

そんなある日、私は男子フロアの担当ユニットで他児童と過ごしていたが、どこから泣き声とともに私を呼ぶ声が聞こえ、階段の踊り場に目を向けるとそこにはＤさんが立っていた。〝フーミ〟と呼ぶその姿にふと２年生の頃のＤさんを思い出した。声を掛けると「私は障害者じゃないよね」と言って泣いていた。面接等でそう言ったワードを聞いたのだろう。意に沿わない投薬治療を行い、身近な大人から障害という言葉を聞かされたＤさんから「私はフーミと一緒だよね？」の問いかけに、どのような思いがあるのか、考えても答えは出るわけでもなく言葉が詰まってしまった。

その日から度々、階段の踊り場で話を聞く時間を設け、寄り添い続けようと心掛けた。Ｄさんに元気が見られ始めた頃、街中のステージでダンスを披露する機会があり、人前で話すことも、実習先の職員へ質問することもできなかったＤさんが、大勢の人の前で２曲のダンスを踊りきり、周囲の大人を驚かせた。

いつもの踊り場で、来年も頑張っていこうと話していた矢先、その年の三月に私は施設を離れることが決まった。

お別れ遠足にて、その知らせを聞いたＤさんはその場で泣き崩れた。それを見越してか、女性職員がすぐにＤさんを抱き寄せてくれていた。そんな彼女を前に私は掛ける言葉が見つからずにいた。

後日、いつもの踊り場でＤさんから「お願いがある」と話があった。「卒業式に一緒に出て欲しい」とのこと。

施設から特別に許可を頂き、卒業式に保護者代わりとして出席することができた。Ｄさんと一緒に在校生が作るアーチの花道を歩きながら、大きな声で泣いていた小さい頃のＤさんの姿を思い出し、涙を堪えるので精いっぱいであった。Ｄさんとの８年という長い年月は、二人で支え合ってきた時間でもあったからだ。

別れの日、先に施設を去ることに申し訳ない気持ちが押し寄せてくる中、泣きながら「今まで一緒でいてくれてありがとう」と伝えてくれたＤさんに、明日から一緒でいてあげることのできない現実とともに自分の無力さを実感した。

6　どっちの話も聞いてくれてありがとう

新しい職場に移り一年目。新しい環境に馴染む間もなく、児童同士の関係性に明らかな上下関係があり、暴言や喧嘩が数分おきに見られ呆然とした。

その中でも特に目立っていたのがＥさん（男子小学５年生）。意に沿わないことがあると他児童へ暴言暴力が出てしまっていた。またその逆にＥさんは何もしていないが、「Ｅが悪い。あいつが犯人だ」と事ある毎にＥさんが疑われていた。

普段から他児童とのトラブルが多いＥさんは、職員が聞き取りをしようとしても「おれはやってねえ。喋らねえからな」とお決まりの言葉を言っていた。

しかし、このお決まりの言葉は周囲の人を信頼していないのか、不安の表れなのか。どちらにせよ生活の場が、Ｅさんにとって落ち着けない場所であることに課題を感じた。

私はＥさんに反応してもらうことを心掛け、生活の中でもコミュニケーションを取り続けた。トラブルも日常的で明らかにＥさんに非があったとしても「Ｅさんは怪我してない？」と声を掛け「俺は強いから、殴られるわけねぇだろ」とお決まりの言葉とは違う発言を引き出しながら、少しずつ振り返りを行い、最後はトラブルがあっても仲直りをするということができるようになった。

２月になると二分の一成人式が学校で行われた。親に手紙を渡し感謝を伝える日でもある。Ｅさんに付き添った職員から手紙をもらった。どうやらＥさんは親の代わりに私へ手紙を書いていたようだった。

そこには「優しくしてありがとう」等の内容が書かれていたが、一か所だけ意味が掴めない「どっちの話も聞いてくれてありがとう」という言葉があった。

私はその夜、Ｅさんに手紙の感謝とともに言葉の意味を質問した。するとＥさんから「俺は小１までは中学生とか職員からも可愛がられていたんだ。だけど、小１の時にやってもいないことを周りの奴ら（児童・職員）に犯人扱いされて、ムカついた。だから可愛いキャラは止めたんだ。でもタッキー（私）は喧嘩しても相手と俺の話、どっちの話も聞いてくれてるじゃん。だからそういう意味だよ」と話してくれた。

言葉の裏には深い意味があり、それは芸術療育でも作品に思いを込めるようなもので同じように感じた。また、小学１年にあった一つの物事がきっかけで傷つき、自分を守るように言葉や暴力で盾を作っていたのではないかと感じた。なにより「僕の話を」ではなく「どっちの話も」と相手を意識して書いたＥさんの優しさに触れることができた。

Ｅさんの手紙は私にとって大切な宝物でもあり、教育者としても忘れてはならない教科書となった。

7　さいごに

今回は私の思い出をいくつか綴る形で、芸術療育の背景にあるこども達との関わりを紹介した。はじめにも述べた通り、美術教育とは関係がないと思われる方もいるだろう。しかし、知っておいてほしいのは、今回の話に出てきたこども達の中には壮絶な体験をしてきた子もいる。

成育歴だけではない。障がい児入所施設で働いてた頃はこども達と買い物へ出かけると、周囲の視線が痛いほど刺さってくる。嫌でも聞こえる「可哀想な子」等の言葉。歩けば必要以上に距離を開けられる。私自身心が締め付けられる思いを何度も経験した。

作品展でも同様に観に来た方からはよく「こういう子達って、色使いが独特で芸術的ですね」と言われることがある。一見褒め言葉に聞こえるが、私には壁を感じてし

まう。でも、それを気にし、時として悲観的になるのはいつも大人であって、こども達の世界はそんなことで濁ることはなく、いつも優しく澄んでいるように思う。

私が一緒に生活をしてきたこども達の造形表現は特別なものではなく、ただひたすらに純粋で素直なのだ。

だからこそ私も、目の前のこども達の心の声を聞き、向けられた手を握り、その気持ちを抱きしめることを常に心掛けなければならない。

それが、私の芸術療育を行う上での唯一の約束事としている。

作品を知るのではなく、その人を知ることが大切であり、それが健やかな表現を育む基盤になるのだと思う。だからこそ、今回はこのような論文とも言えない、記録を作成させて頂いた次第である。

たくさん笑って、たくさん怒って、たくさん泣いて、たくさん喜ぶ。そんなみんなに悩まされ、大変なこともあったけど、それ以上に笑い合って、喜び合えたその日々が何より大切な学びの時間でもありました。そんなみんなにたくさんの〝ありがとう〟を伝えたいと思います。

造形表現だけではない。人として何が大切なのかを教えてくれたのは、私が出会ったこども達でしたから。